



ふれあい

財団法人日本医療機能評価機構認定病院
DPC 特定病院群
地域医療支援病院
地域がん診療連携拠点病院
臨床研修指定病院



高松の池で羽を休めるの白鳥たち (撮影: 島岡 理)

【もくじ】			【行動指針】
不安と苦痛に向き合う～年頭のご挨拶に代えて～	院長	宮田 剛	1. 良質な医療の提供
安全ファーストであるために	医療安全管理専門員	浅沼 真奈美	2. 優れた医療人の育成
臨床研修医担当からひとこと	業務企画室主任	中島 蓉子	3. 地域医療機関への診療支援
	業務企画室主事	千田 達矢	4. 救急医療の充実
	業務企画室	前川 飛鳥	5. 災害医療の体制整備
色々あります不整脈 (第 60 回健康講座より)	循環器内科長	遠藤 秀晃	6. 臨床研修体制の充実
	循環器内科医長	近藤 正輝	7. 健全で効率的な病院経営
	臨床工学技師	山影 哲博	
絵画寄贈「初冠雪の朝」		広報委員会	
クリスマスコンサート	ボランティアひまわり	上柿 早苗	
編集後記	広報委員長 (小児外科長)	島岡 理	

基本理念

高度急性期医療を推進する県民に信頼される親切であたたかい病院

※広報誌「ふれあい」は1,800部を作成し、県民、連携医療機関、行政機関等に岩手県立中央病院の情報をお届けしています。

「不安と苦痛に向き合う」 ～年頭のご挨拶に代えて～

院長 宮田 剛

2019年が平成の年号最後の年という感慨もありますが、これからの病院の課題を見直す節目としたいと思います。

医療にまつわる話題は、人生最終段階における医療のあり方、多すぎる薬の問題、病院の機能分担、など事欠きませんが、現状として当院で起こっているひとつの現象は、どんどん増える救急車搬送です。岩手医科大学病院が矢巾に移転することが当院へ搬送台数増加を生むと予想していましたが、その移転前からの増加は一つの社会現象ととらえて対応する必要があると考えています。

高齢化による医療費増加を、国は介護との分離によって解消し、「ときどき入院 ほぼ在宅」を掛け声に、在宅への流れを推進しています。「具合の悪い時はいつでも救急病院がみてくれるという担保のもと、安心して住み慣れた自宅で過ごそう」、ということなので当院もそのセーフティネットとして役に立っていると考えられるべきかもしれませんが、この増加の勢いは、在宅を過ごしている人の不安の数が増えているのだと捉えることもできます。胸が苦しい、おなかが痛い等、具体的な症状は大きな不安であり、まさに当院急性期医療の出番と考えています。

昨今のキーワードの一つであり、昨年末に「人生会議」という愛称がつけられたACP (Advance Care Planning) のAdvanceは「進歩的な」の意ではなく「これから先のことを、前もって」という意味で用いられています。人生の、あるいは自分の健康の見通しを持ち、いざという時にどうするかを決めておくこと、自分や周囲の肉親の今後の見通しを持ちながら皆で見守っていくことができれば、根底の不安を少し和らげることになるのかもしれませんが。

病気を治す、という発想はもちろんですが、それよりも病気による「苦痛や不安の解消」に着目することをスタッフにも提案しています。安心の人生をサポートできるよう、地域医療機関とさらに強力で連携しながら当院の使命を果たしていきたいと思しますので、今年もご理解ご協力をお願いいたします。まずは皆様方が健康で豊かな一年になりますようにお祈り申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。

安全ファーストであるために

医療安全管理専門員 浅沼 真奈美

「医療安全は確認との戦いといっても過言ではない」と偉い先生が・・・別の偉い先生は「医療安全の戦いに終わりはない」とおっしゃいました。まさにその通りであると実感し、患者さんにとっての安全な環境づくり、そして職員の皆さんが安心して働ける安全職場風土の醸成をめざし、医療安全管理専門員として2年目・・・「どうせやるなら楽しく」をモットーに、小さなことからコツコツと活動させていただいております。

1999年のY市立大学病院での患者取り違え事例以来、医療安全は個人の努力ではなく組織全体で取り組みをしなければ防ぐことはできない事であるという考え方に变化しました。当院医療安全部では「安全ファースト」を掲げ、誤認のない安全な医療の提供を目指し患者誤認防止対策に力を注ぎ活動を継続しています。院内全体への患者誤認防止ポスターは、「くすっと笑いながら印象に残る」をコンセプトにユーモアを含ませた内容になっていますがご覧いただけただけでしょうか？また、今年度の新たな取り組みとして、職員の安全意識の向上を目指すと共に、患者さんにもチーム医療の一員であることをご理解いただき参加してもらえよう朝の院内放送を始めたところです。同時に外来の案内板も活用しています。

人には「聞きたいように聞く。見たいようにしか見ない。聞いても忘れてしまう。都合の良い解釈をする。人の注意力には限界がありどんなに注意深く慎重な人であっても疲労や錯覚で間違いを起こす」という厄介な特性があります。「人は誰でも間違える」。だからこそ1人1人が高い安全意識を持ち行動する事が大事だと思っています。

間違いのない医療は患者さんの、ご家族の、そして医療者の最大の望みであります。患者さんの尊厳を大切し、誤認のない安全な医療を提供できるように、予測と実践を繰り返しながら活動していきたいと思しますので今後ともご協力を宜しく願います。斬新で愛にあふれた安全対策のアイデアがありましたら是非声をかけてください。

安全な医療を提供するために

患者さんからお名前をお聞きします





不整脈ってどんな病気？

循環器内科長 遠藤 秀晃

心臓は 24 時間 365 日休むことなく規則的に拍動を繰り返し、生きていくために必要な栄養を体中の臓器に送り続けています。普段この拍動に気づくことはありませんが脈をとると規則正しく血液が送られていることを知ることができます。

ところがこの心臓の拍動が規則正しく行われなくなると脈が乱れたり、極端に速くなったり遅くなったりします。これが不整脈といわれる病気となります。不整脈による症状は動悸、めまい、息切れ、ときには突然死をきたすものもありますが、何も感じない無症状の不整脈もあります。心電図のように心臓の拍動を調べる検査により不整脈の種類や危険性を調べて必要な治療を行うことができます。不整脈による症状をお持ちの方は検査を受けて適切に対処し、健やかな毎日を送りましょう。

不整脈を根治する

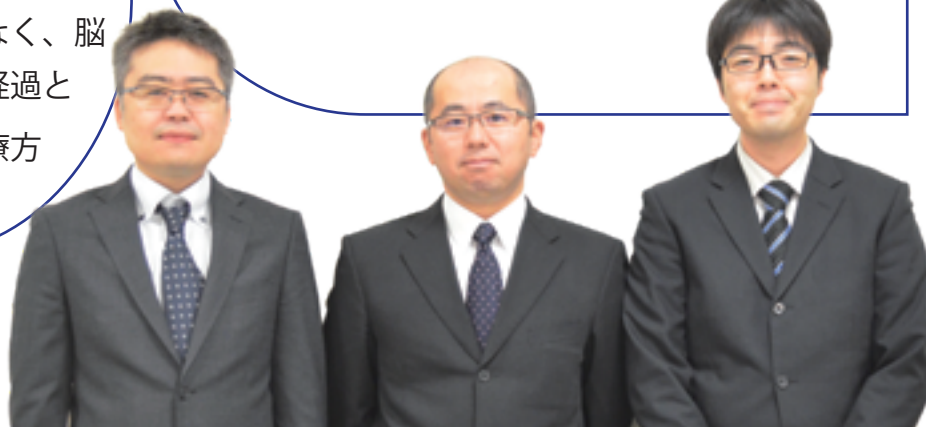
カテーテルアブレーション
循環器内科医長 近藤正輝

心臓は刺激伝導系とよばれる回路を電気信号が伝わることで収縮を繰り返しています。不整脈はこの電気信号が乱れることで発生します。カテーテルアブレーションとは血管を通して心臓の中にカテーテルを挿入して異常な心筋を焼灼し、電気信号の乱れを整える治療法です。手術件数は近年増加しており、昨年は全国で約6万件の手術が行われたと推定されます。なかでも心房細動のアブレーションが増加しており、当院でも同様です。心房細動は動悸、息切れの症状だけではなく、脳卒中の原因となる疾患です。心房細動は経過とともに進行する疾患ですので、早めに治療方法の相談をしましょう。

ペースメーカーのお話

臨床工学技師 山影 哲博

ペースメーカーとは、洞結節の異常で、興奮が起こらない、または起こりにくい状態や、刺激伝導系の途中が切れて、心室に興奮が伝わらないなどにより、脈が遅くなる疾患に対して電気刺激をして脈拍を増やす医療機器です。50年以上の歴史があり、推定25万人の方に植込まれています。電磁干渉という問題がありますがほぼ植込み前と変わらない日常生活が送れるようになっています。植込み後は一生付き合っていく機器ですので分からないことがありましたら、定期検査でお待ちしていますので何でも相談してください。



循環器内科医長
近藤 正輝

循環器内科長
遠藤 秀晃

臨床工学技師
山影 哲博

絵画寄贈

「初冠雪の朝」 村谷 公基氏

先日、村谷公基様より、絵画作品「初冠雪の朝」をご寄贈いただきました。

寄贈を頂いた時のご挨拶文を掲載させていただきます。絵画は、待合ホールに飾っています。ぜひ、ご覧ください。



60代までは健康そのもので、国内外の山登りをしたり絵を描くことが趣味でした。下手な横好きではありましたが、NHKの文化センターというところを任されて、それから絵のほうに本格的に先生の指導を受けて取り組むことになりました。まだ見る人から見れば初心者の絵ではありますが、私、6月に亡くなった家内共々中央病院にはお世話になったため、私はあと何年生きるかわかりませんが、この病院になにがしか記念になるものを贈りたいとつねづねそう考えていて、今回ご相談したところ快くお引き受けしていただいたため、どうか適当な場所がありましたら飾っていただきたいと思い今日ここに搬入させていただきました。私にしてみるとこの病院は本当に長い間お世話になっています。その気持ちだけであります。感謝の気持ちを込めてここに贈らせていただきたいと思います。

病院と私の縁は非常に深く、本当は関係ない方がいいですが、長く勤務した八戸でも市民病院があります。あそこにもこれの4分の1くらいの岩手山の絵を飾らせていただいております。あとは法音寺にも本堂のつづきの部屋に法音寺の山門の絵を飾らせていただいております。ですから公共の建物にはこれが3作目の作品になります。これからも健康には気を付けてまいりたいと思います。

私も入院している患者の気持ちはよくわかりますし、これが少しでもそういう方々の励みになればいいと思っています。啄木や賢治の作品にも岩手山は嫌というほど取り扱われているし、岩手山はやはり岩手の誇るシンボルだと思います。



クリスマスコンサート (平成30年12月19日開催)

ボランティアひまわり 上柿 早苗

病院スタッフのみなさんの大きなご協力により、用意した三つのプログラムを披露することができました。

一つ目のクインテットは完成度が高く、会場がぐっと温まりました。

二つ目のメロディベルは、ひとりひとり力を出し切りました。

三つ目は全体合唱「ゆぎ」。

観客である患者さんや付き添いの方にも小さな楽器を配りました。冬は犬のように駆け回っていたという院長先生の呼びかけに、曲が始まると、澄んだピアノのメロディにのって、優しい歌声と鈴やタンバリンの音色が、あちこちから聞こえてきました。会場は音が重なり合って音楽に包まれました。

「中央病院には中央病院のクリスマスが来たね」演奏が終わって、メンバーの一人が言っていました。



編 集 後 記



成年から亥年へ。平成最後の年になりました。干支を調べてみますと亥年は十二支の最後ということで、子年から始まった流れが亥年で終わることを植物に例えて、子年で種子の中に新しい生命が

生まれて丑年で芽が出て次第に成長し、成年でたわわに実った果実が亥年でまた種子となり、エネルギーを蓄えて次世代への準備をするという意味があるようです。つまりは新たな始まりに向けて準備をする年ともいえるのではないのでしょうか。今までできなかった事、新しい事、また、今まで準備を進めて暖めてきた事を試す年ともいえるのかもしれません。本誌も画面構成から内容まで全面的に刷新してから、また違った雰囲気をお届けさせていただいております。本誌を通じて患者さんだけでなく、医療関係者、職員一同が健康でより良い社会生活を送れますように、その一助を果たせればと思っておりますので、さらに魅力的な「ふれあい」になるようご意見をいただければ幸いです。本年もよろしく願い申し上げます。



お知らせ

次回の健康講座は・・・
万人の悩み ひざの痛み
～手術をしない治療から最新手術まで～

平成31年3月9日(土)
14:00～16:30

プラザおでつで開催します。
入場無料・事前登録不要です。
多くの方々のご参加をお待ち
しています。



岩手県立中央病院
〒020-0066 岩手県盛岡市上田 1-4-1
TEL:019-653-1151 FAX:019-653-2528
<http://www.chuo-hp.jp>

ふれあい No.284 平成31年1月
岩手県立中央病院 広報委員会

◆委員長 島岡 理

相馬 淳	吉田 朗子
吉川 和寛	照井 彰子
大川 みか	城戸 直人
佐々木 貴美子	藤原 綾乃
片岸 久	松ノ木 昌紀
岩淵 ひろ絵	日當 光紀
工藤 彩香	吉田 奈穂子

ふれあいはホームページでもご覧頂けます。

[岩手県立中央病院](#) [検索](#)

臨床研修医担当からひとごと



研修医は2年間研修する病院を決めるために学生の頃から様々な病院を見学します。その窓口となっている医療研修部ですが緊張してくる学生が多いのでそれをほぐすつもりで話をしています。

年間通して実習生を含めると200人以上の学生が病院を訪れます。そして、当院を選んで来てくれたみんながとてもかわいくてなりません。もう大人ですが、今日の調子はどうかな？元気がないな…となんとなく気になります。最初は必死で頑張っていたことも、慣れ感が出てくるとつい忘れてしまうことがあります。

行事でも自分には関係ないとか必須じゃない！とかで決めてはいないでしょうか。病院は一人では成り立ちません。人を相手にする仕事なので、いろんな人との出会いや興味をもって耳を傾けることも学びなのです。患者やその家族を共にサポートするスタッフがたくさんいます。

言葉1つで勇気を与え、周りの雰囲気も変わることもあります。私も初めて会う学生や研修医と関わることで学び多く日々の活力にもなっています!!

業務企画室 前川飛鳥



今年度より中央病院での勤務となり、業務企画室にて臨床研修を担当することとなりました。初めての異動、新しい職場環境、そして初めて経験する臨床研修という業務と初めての事が多く、年度当初は毎日の業務の把握で精いっぱいであったように思います。

最近になり日々の業務と環境にも慣れると共に、研修医の皆さんについても色々と見えてきたことも多いように感じます。

日中や日当直など救急で主体となり診療を行うところや、また研修医室での休憩や食事の合間にも勉強をしている様や、時折見る先生たちの疲れている顔を見てその業務の過酷さの一端を見たような気がし、病院に勤め「臨床研修医」という言葉は知っていても、その本質は実際に業務に携わらないと見えてこない部分なのかなと感じました。

中央病院は研修医の数も多く、また修了後の進路も多岐に亘ることから今後の医療の将来を担っていく先生方の研修に携わっていくということは貴重な経験であり、糧となる事の多い業務であると感じます。

業務企画室 主事 千田達矢

これまで4世代の研修医に携わってきました。縁あって当院に来た研修医が世代によって見せる多彩な個性・学年カラーは関わっていて楽しいものです（もちろん楽しいことばかりではないですが）。

私達事務は研修医が2年間の研修を修了するまでの事務的業務をするのは当然ですが、「研修医」と「上級医」の中間にいる、両者の橋渡的な存在でもあります。

「良い研修病院は研修医と事務職員がとても良い関係性を築いている」と言われたことがあり、この言葉が心に残っています。事務職員の重要さを心に留め、時には愚痴も聞きながら、研修医にとって「何か困ったら事務へ」という存在でありたいと共に、何でも屋にならないよう、自分で頑張れるところは頑張ってもらいたい。優しいだけではなく時に厳しさを持つ事務担当となることが目標です。

毎年3月が近づくとつれ、旅立つ2年次研修医に寂しさを感じつつ、次の1年次研修医はどんな色になるだろう、という楽しみを感じています。

業務企画室 主任 中島 蓉子

